



酒天之美祿
さけはてんのびろく
 Number 69

「酒伝記」

酒をこよなく愛した偉人たち

北原伸一 ● Shinichi Kitahara
 イラスト / 永美ハルオ氏

いきなり私事で申し訳ないが、筆者には高校生になる息子がいる。勉強やスポーツなど、特別に秀でた部分はなく、ハンカチ王子の活躍と人気振りを多少羨ましくも思うが、それは親のエゴ、「とんび」の子は「とんび」であり、けっして「鷹」ではなかった。父親のDNAを受け継いだ宿命だから仕方あるまい。ただ人の道だけは外れなければいい、素直に育てばいいと思ってこれまで見守ってきた。そんな親の気持ちを知ってか知らずか、周りの人たちにも恵まれたのだろう、学校からの呼び出しや、警察のお世話になるといったことは、これまでは一度もない。

そんな息子もそろそろ将来のことを真剣に考える年齢になってきた。

どんな子供にも無数の可能性がある。なにも親が子供のレールを敷いてやる(強いてやる)必要などまったくない。自らが自らの道を切り拓いて、ナットクできるまで邁進すればいい。軌道がズレたなら、少しだけ人生の先輩として、経験談を話してやればいい。大切なのは、どれだけ悩み、考え、行動するかではないだろうか。

息子が幼少のころから、すこしでもそのヒントになればという親心から、偉人たちの伝記を与えてきた(ホントは母親が与えたのだが)。

偉人がそれぞれ行ってきた功績を知ること、自分の生きていく道を見つけるきっかけになれば、あるいは努力すること

「酒伝記」

酒をこよなく愛した偉人たち



の大切さ、人を思いやる優しい気持ちも育んで欲しいと思ったからである。
泣き虫で弱虫だった坂本龍馬、30歳から看護士になったナイチンゲール、子育てをしながらノーベル賞へつながったキュリー夫人、学校へ行かなかったエジソンなどなど……。

偉人には偉人の努力と涙ぐましいエピソードが隠されている。

ある日の夕食の食卓で、ひよんなことからその偉人の伝記の話になった。そこで幼少の時に与えた伝記をどれだけ吸収しているのか何気に聞いてみた。
「なあ、ヒロム。父さんが小さいときに買ってきた伝記、覚えている話ある？」

「そりゃ、すべて覚えてはいないけど、何気に覚えている」

「野口英世とか、良寛さんとか？」

「そうだね……(気の無い返事)」
興味は目の前のチキンカツであり、テレビのバラエティ番組である。かといってコミュニケーションが皆無ということでもない。幼いころに比べたら口数も少なくなっ

たが、毛嫌いの上に無視され、子供に気を使う親がいるといわれる今の時代にあつて、まだまだ我が家は会話のある方だ。同世代のお父さんの中には、娘と数カ月も会話していないなんて方もいるから、それに比べればいいほうだ。

不意にヒロムが口を開く。
「ナポレオンが飲んで飲んでいた酒だから、ナポレオンっていうの？ あのブランドー」

唐突で厄介な質問を投げかけてきた。昔の質問はもう少し可愛げがあった。

〈以下回想〉

「ねえねえ、パパ、だんご虫ってなんで丸くなるの？」

得意分野、即答だった。

「それは敵から身を守るためだよ」

「ふくん、そうなんだ。だんご虫って偉いんだね」

「そうさ、自分の身は自分で守るんだ」

「だからパパのお腹も自分で守ってるの？」

「こりゃ、ヒロムに一本とられたな、あつはっは」

〈再び現実へ〉

確かに伝記というキーワードから、ヒロムの頭脳はナポレオンを導き出した。しかし、よりによって酒とは。

「さては、隠れて酒飲んだな」

「ち、ちげーよ(汗)。部活の3年生の引退送別会にOBが来ていて、その大学生の先輩が飲んでたんだよ」

「ナポレオンとはそりゃ、リッチな先輩だな。それで、調子にのつて少し飲ませてもらうって……か」

「舐めた程度だよ、ビールだって」

「ビールも飲んだのか」

「あつ、いけねえ。それよりナポレオンはどうなのよ」

「話をすり替えない。酒は20歳になってから、いいな」

「父さんは20歳前に飲んでないの？」

「も、もちろんさ(汗)」

「まっ、いや。でナポレオンは？」

そんなやり取りをした後、調べてみたところ、ある酒造メーカーのHPに記載されていた。それによれば、

「19世紀の末頃、セント・ヘレナ島に流されたナポレオン1世に、彼と親しかったコニヤックメーカー・クルボアジェの創業者がコニヤックを贈りました。これを酒好きだったイギリス兵が盗み飲み、思わず「さすがナポレオンのコニヤックだ」と賛嘆したのが「ナポレオン・コニヤック」という名前の使いはじめだと言われています。このことらしい。」

酒にもいろんなこぼれ話があるもんだ。そういえば歴史上の偉人、著名人はどんな酒を好んで飲んでたのだろうか。ついでに酒にまつわるエピソードも調べてみよう。

その前に昨年あるビールメーカーが調査した面白い資料があったので、紹介して



これは戦国の神将・上杉謙信の死後に発見された辞世の句である。なんとも日本酒の好きな様を表現した句である。謙信が

一期の栄 一盃の酒
四十九年 一酔の間
生を知らず また死を知らず
歳月ただこれ 夢中のごとし

余談はともかく、歴史上の人物の好きな酒をみてみよう。

おこう。一緒に酒を飲み交わしたい歴史上の人物「アンケート調査である。20歳以上の男女から無作為に抽出し、回答を得たものを集計している。



●金日成
ヘネシー・コニャック(フランスのブランデー)

「ひまわり」、「医師ガシエの肖像」などの代表作を持つフランスで活動したオランダ人画家。アブサンはフランスの医師が医薬品として生み出し、スイスで販売された後、フランスで大ブームとなる。原料はニガヨモギ。ゴッホは自画像を描くのに邪魔だった耳を切断し、後に自殺を図るが、アブサンのために精神病が悪化したことによる奇行ともいわれている。

●フィンセント・ゴッホ

アブサン(フランスの香草酒、製造販売禁止)
アブサン(フランスの香草酒、製造販売禁止)
「ひまわり」、「医師ガシエの肖像」などの代表作を持つフランスで活動したオランダ人画家。アブサンはフランスの医師が医薬品として生み出し、スイスで販売された後、フランスで大ブームとなる。原料はニガヨモギ。ゴッホは自画像を描くのに邪魔だった耳を切断し、後に自殺を図るが、アブサンのために精神病が悪化したことによる奇行ともいわれている。

●アドルフ・ヒトラー
アスバツハ(ドイツのブランデー)
国家社会主義ドイツ労働党党首。極端な民族主義と反ユダヤを掲げた独裁者。父親が酒好きから、酒場で脳卒中をおこしたため、本人はほとんど飲まなかったとも言われる。愛した酒といわれるアスバツハは、1892年にリューデスハイムでフーゴー・アスバツハが造ったブランデー。原料はイタリア産。砂糖とコーヒーを混ぜて飲む人もいる。

常用していたのは、直径12センチもの大杯で、今も現存しているという。しかし、その酒好きが祟り、春日山城の厠で脳卒中が原因で倒れ、49歳の若さで、逝ったと伝わる(異説もあるが)。
ここで、ずらつと、歴史上の人物がこよなく愛した酒を調べてみた。



●ジュリアス・シーザー
バローロ(イタリア産ワイン)
古代ローマ最大の軍人であり政治家。シエークスピアの戯曲のブルータスに暗殺された際の「ブルータス、お前もか」の台詞はあまりにも有名。バローロはイタリアワ

●ゲート
アスマンズハウゼン産赤ワイン(ドイツ)
ドイツを代表する詩人だが、小説家、科学者、政治家としての顔も持つ。葡萄酒商人でもある父親の影響からか、ワインを特に好んだとされる。アスマンズハウゼンはドイツでは珍しい赤ワインの産地で知られる。

言わずと知れた朝鮮民主主義人民共和国の前国家主席。スターリン型の政治手法で独裁体制を貫いた。ヘネシーは、コニャック地方のブドウだけを使用し、伝統の技でブレンドしている。海外土産の定番のひとつ。

「酒伝記」

酒をこよなく愛した偉人たち

インでも最高級とされ、生産地、ブドウ品種、製造法まで厳しく規定されている。

●チンギスハーン

アイラグ、シミアルヒ(馬乳酒)

モンゴル帝国の初代大ハーン。抗争していた遊牧民諸部族を統一し、中央アジア、イランなどの征服の立役者。アイラグは馬乳酒で、シミアルヒはアイラグを蒸留したものだ。アルコール度数は3%程度。

●ナポレオン一世

シャンベルタン(フランスワイン)

「余の辞書に不可能の文字はない」で知られるフランス革命後のフランスをまとめた政治家。自分の名のコニャックを愛したわけではなかったようだ。ブルゴーニュの赤ワインといえばこのジュヴレ・シャンベルタンで、ナポレオンはこれ以外のワインは一切口にしないという徹底振りだった。

* * *

何人かの歴史上の人物の愛した酒を駆け足でみてきたが、次にはそうした名声を残した人物の酒にまつわるエピソードを探してみた。

近代のフランス画家であるモリス・ユトリロ。代表作の「コタン小路」「モンマルトルのアブルヴォワール通り」など作品のほとんどが風景画。

そのユトリロは大のワイン好きで、10代の若さでアルコール中毒になった。その治療のために入院した精神病院の医師は、アルコール治療の一貫としてユトリロに絵を描か

せる。これがユトリロの画家としての出発点となる。酒は芸の肥やしの代表例だ。

心優しい好々爺とテレビドラマの主人公は目に映るが、さにあらず。水戸黄門こと、水戸光圀のことである。テレビでみる諸国漫遊の旅では、質素な食事風景がたまに映るが、実際の黄門様は、大の酒好きで毎日のように友人を招いては大宴会を繰り返していた。



黄門様の主治医が残した文献によれば、「普通の大戸(酒豪)ども皆沈酔すれど公は厳然としておわせし也。御座中の皆どもことごとく正体なく、明日になりては昨夜何を申せしも覚へたる者なきに、いつとも公は始中終のこと少しも忘れ給ふことなし」と書いている。

当然、全国行脚を行っている間は、ご当地の特産物を必ずその日の食卓に出させると言うグルメ派だ。

同じく全国を回った松尾芭蕉もまた、酒豪の一人として上げられる。「酒のめば いとど寝られぬ 夜の雪」

「川舟や よい茶よい酒 よい月夜」
「月の宿 亭主杯 持ちいでよ」

など酒にまつわる句も少なくなくおよそ70句に達するという。

とりわけ、「宵のとし 空の名残惜しまぬと 酒呑み夜更かして 元日寝わすれたれば」の作品は、「大晦日の日に酒を飲みすぎて、せつかくの元日を寝忘れてしまふ」との意味を持つ。

「禁酒のすすめ」の著作を持つ福沢諭吉も自他ともに認める無類の酒好きである。

「福翁自伝」によると、幼い頃、月代さかやきを母に剃られるのが嫌だったが、「あとで酒を飲ませてあげる」の一言でおとなしくしたがっていたというエピソードがある。「禁酒のすすめ」は朝酒を辞め、昼酒を辞め、晩酌を人並みに減らした際のことを書いたものだが、63歳で脳卒中で倒れ飲めない身体になつてしまう。

「人の世に楽しみ多し然れども 酒無しにして何の楽しみ」

「酒の歌人」の異名を持つのが若山牧水。泥酔状態で寝込んだ場所が悪かった。なんと市電のレールの上。周りの黒山の人だかりに気づいた運転手が急ブレーキをかけて大事を避けられたという。43歳で肝硬変に。

駆け足で紹介してきたが、けつして「飲兵衛だから、偉人になった」わけでも「偉人だから飲兵衛になった」というわけでもないからな、わかつたか、わが愚息よ。